



温故知新



組織で進める安全管理 みんなで取り組む安全活動 未来へつなげよう安全文化



厚生労働省では、7月1日(土)から7日(金)までを「全国安全週間」、6月1日(木)から30日(金)までを準備期間として、各職場で巡視やスローガンの掲示、労働安全に関する講習会の開催など、さまざまな取組を行っていきます。

今年で90回目となる全国安全週間は、労働災害を防止するために産業界での自主的な活動の推進と、職場での安全に対する意識を高め、安全を維持する活動の定着を目的としています。

事業場では、労使が協調して労働災害防止対策が展開されてきました。この努力によって、労働災害は長期的に減少し、平成28年の労働災害については、「死亡災害」は2年連続で1,000人を下回る見込みです。

しかしながら、休業4日以上「死傷災害」は前年より増加する見込みで、「死亡災害」についても平成28年11月から平成29年2月まで4か月連続で前年同月を上回っている状況です。これらの要因としては、基本的な安全管理の取組が労働者に徹底されていないことや、小売業・社会福祉施設・飲食店などをはじめとする第三次産業では、多店舗展開企業などの傘下にある店舗などに安全担当がおらず、安全活動が低調となっていることなどが考えられます。このような状況を踏まえて今年度のスローガンでは、事業場と本社による全社的な安全管理を進め、労働者一人一人の安全意識の高揚を図り、安全な職場環境を継続的に形成するよう呼びかけています。

【今号の主な内容】

- P① 安全週間準備期間お知らせ
- P② 働きアリの法則
- P③ GW
- P④ 今月のことわざ・格言



発行

野田工業 株式会社
東京都中央区銀座6-6-19
TEL : 03-3572-1866
FAX : 03-3575-0420

ことわざ・格言にならう安全衛生訓

● 大は小を兼ねる ●

・工具、用具は目的に合ったものを

「大は小を兼ねる」とは、大きいものは小さいものの代用にもなる。小さ過ぎるよりは、大き過ぎる方が役に立つ、という意味で使われています。確かに、長いハシゴは低い場所にもかけられるが、短いハシゴは高い場所にはかけられません。大きな着物は小さな人も着られるが、小さい着物は大きな人には着られないなど、大きいものの利用範囲は広いようです。

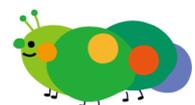
しかし反対に、五寸釘は一寸釘の代用にならない、スコップは耳かきにならないなど、大きいことが困る場合もあります。ボルトのナットを締めるのに大きなスパナを使って、ボルトをねじ切ってしまったたり、小さな細工なのに大きな電動工具を使って手元が狂ってケガをしたなどの事例が少なくありません。天井が低いのに長いハシゴを使ったため、ハシゴが滑って転落したケースもあります。

工具・用具を使う場合など、「大は小を兼ねる」は禁物です。目的に合致した正しいものを使用しましょう。

【 職長会のお知らせ 】

- ★日時 平成29年6月19日(月)
- ★時間 18時30分～
- ★会場 銀座ユニーク 3階

注：開始時間が30分遅れます。お間違えの無いようお願いいたします。





ゴールデンウィークはどのように過ごしましたか？



今月と来月の温故知新の編集は産休中の藤根さんに代わり(株)NODASTの増田が担当いたします。よろしくお願いします。ペコリ

私ネタなんですけど・・・

私の出身は鹿児島県です。3年ぶりに次男を連れ実家に帰省しましたが・・・

こちらでも度々ニュースになっております桜島が約1年ぶりに大噴火しまして私の帰省を歓迎してくれました。

今回の噴火は約4000メートルの噴煙をあげたということで風向きもありまして鹿児島市内は火山灰でどんよりした灰色・・・車が走るたびに路上では灰が舞い上がり、マスクをしたり中国のPM2.5も真っ青な状況でした。



しか～し

桜島の癩癩がおきないときは海や山など起伏にとんだ風光明媚な土地です。そして皆さんもご存じと思いますが、芋焼酎や黒豚、そうめん流しなど1年を通して美味しい食を楽しむことができます。機会がありましたら、ぜひ観光先に加えてみてください。



働きアリの2割は怠け者！？【働きアリの法則】

概要

- ①働きアリのうち、よく働く2割のアリが8割の食料を集めてくる。
- ②働きアリのうち、本当に働いているのは全体の8割で、残りの2割のアリはサボっている。
- ③よく働いているアリと、普通に働いている(時々サボっている)アリと、ずっとサボっているアリの割合は、2:6:2になる。
- ④よく働いているアリだけを集めても、一部がサボりはじめ、やはり2:6:2に分かれる。
- ⑤サボっているアリだけを集めると、一部が働きだし、やはり2:6:2に分かれる。

解説

北海道大学の長谷川英祐が詳しく研究し、一般向けの解説書を出しています。それによると、働くアリと働かないアリの差は「腰の重さ」、専門的に言うところ「反応閾値」によるといいます。まず最も(腰の軽い)アリが働き始め次の仕事が発見された時には次に(腰の低いアリ)が働く、と言う形で、仕事の分担がなされている。仕事が増えたり、最初から働いていたアリが疲れて休むなどして仕事が進んでくると、それまで仕事をしていなかった(腰の重い)アリが代わりに働きだす。

すべての(腰の軽い)アリが同時に働き始めると、短期的には仕事の能率が上がるが、結果として全てのアリが同時に疲れて休むため、長期的には仕事が滞ってコロニーが存続できなくなることが確認されている。閾値によっては一生ほとんど働かない結果となるアリもいるが、そのようなアリがいる一見非効率なシステムがコロニーの存続には必要だということのようです。



応用

かつて2000年代の某プロ野球球団は、FA(フリーエージェント)等で各チームの4番打者ばかりを集めていましたが、結局思うような成績を残すことができないという時期がありました。4番打者は魅力的ですが、それだけではなく、盗塁ができる選手やバントなどの小技が上手な選手、守備のスペシャリスト等の各分野に適材適所の選手がいてこそ、チームとして上手く回っていくということです。

また、普通の6割を上引き上げる。普通以上の2割をさらに引き上げるよりも短期間で効果を発揮する可能性が高いからです。真ん中の6割を引っ張り上げると組織全体が引き上げられる事と繋がると考えられます。

アリ社会と人間社会を単純に比較はできませんが、個人が自発的にやらざるを得ない環境を創ることも法則を活用する方法かもしれません。